

# 新島襄と片山潜

## 田中真人

新島襄と片山潜と並べると、奇異なとりあわせという印象を有るいは持たれるかもしれない。片山潜が一三年間のアメリカでの苦学生生活を終えて帰国したのは一八九六年、彼が満三七歳のときであり、新島襄はすでに六年前にその死を迎えていた。両者の間に直接の交渉はなかった。

片山潜は帰国するや、その米英での体験と研鑽をもとに、改良主義的社会事業家として労働組合期成会、社会主義協会の中心人物として、日本の黎明期社会主義運動のリーダーの一人となつていったことは周知のとおりである。アメリカ滞在中の苦学生活をのりきる方便として、生活の支えとし

て、当初その門を敲いたにすぎなかったキリスト教会は、社会事業家、社会主義者としての片山潜を育てる大きな力であった（片山がコミンテルン執行委員としてモスクワに滞在していた最晩年に、その『自伝』をさらに書き改めた『わが回想』では、クリスチャンとしての自らの過去、キリスト教が若き自己に与えた影響を必要以上にささいなものとして扱っているが）。

ところで片山潜は、黎明期社会主義運動のリーダーとなつていくのと同じ時期に、並行して、渡米移民を奨励する渡米協会を組織し、『学生渡米案内』『渡米の秘訣』など幾冊かのパンフレットや『渡米雑誌』を

刊行した。また自らも、かねてからの米テキサス州での農場経営のもくろみを具体化することを主目的として一九〇三年暮に再度の渡米に出発した（一九〇四年八月、アムステルダムにおける第二インターナショナル大会で、片山がロシア社会民主労働党のプレハーノフと壇上で握手するという日露戦争中の著名な事件は、この第二次渡米中のできごとである）。片山が新島襄に言及しているのは、彼の発行した渡米奨励パンフレットの最初のものである『学生渡米案内』（一九〇一年、労働新聞社刊）においてである。まずは該箇所を引用してみよう。

「猶学生が、所謂自活するところの学生として、一ツ心得可きことは、新島襄が米国に於いて外人の土足にかけられ、辱かしめられつる時に際し、我はこれ神州の男子、咄外夷何為るものぞと奮起して、今や日本刀を閃かさんとせし一刹那、いや待て、我はこれ大望を抱いて万里の外に呻吟するもの、例之彼れを切ればとて、我功立つものに非ず、匹夫一人を倒して一生を誤まるは愚の至りなり

と、自ら其恥辱、其切齒慷慨の涙んだを呑んで、其燃え上る怒り炎を静めし大度量、其大度量は後年京都に於て同志社大學を創設するの美拳光榮と成つて、新島襄の名を残すに至れり。これこの忍堪、これこの度量、此は米國に往いて自活し、事業の成功を見んと欲するものになつて、決して免かる可らざるものと云ふ可し。我れはこれ神州の男兒なり、我れ日本魂を以て作られたる身体なり、我れ士族の流れなりと威張つて見たところで決して米國に於いて成功を見るものに非ず。米國に於て働けば或は足を以て教へらるることもあらん、これも米國に在りて珍らしきことに非ず、習慣なる故に米國人の女とても同じく足を以て指揮すべし、然ればとて其れ等に腹を立てると云ふことなれば、為すことすると皆、立腹の基となるが故に、この点は日本人と同様な考へを以て交際しやふと云ふ訳には行かぬことと覺悟せざる可らず。其覺悟を以て米國人よりも尚高き理想を有ち、天下に恥ぢざることを卓抜なる大目的を以て、精神上の修養を

怠らざれば、飯炊きを為すも可、庭掃きをすも可、雪隠の掃除を為すも可、風呂場の清めをするも可、例ひ罵られ土足に蹴けらるるも可。我れは目的のために奴隸たり、目的を果さんがために自活を求めんがために人に奴たり。然れども我が目的を果すの日は、即ち奴隸に非ずして、神州の男兒、我れ最後に彼れよりも猶高き位置に立たん、我れ勝利を占るものなりてふ、天下に恥づることなき理想を以て進まば、何の怒るところかあらん、何の恥づるところかあらん。其天下に恥ぢざる志を以て、賤しき業を為すはこれ却つて美なり。米國人も人なり日本人も人なり、此間何の隔離かあらん、米國人は却つて心にこれを稱賛せん。大學校に学ぶところのものにして、賤しきことを為て、夫れにして忍耐するの有様を見れば、必ずしもこれを感じこれを稱賛せずして止まんや。猿面藤吉何時迄も猿面藤吉に非ず、終りに於ける勝利を忘る可らざることを知覚せよ。」(四九〜五一ページ)

ここで片山が言及している、新島が米人

から屈辱的ふるまいを受けた事件とはいつたことをさすのか、この文章のかぎりでは明確ではない。一般に知られているもっとも著名なエピソードは、新島が一八六四年に函館から乗船して上海に向つたベルリン号の船内のできごとである。大した資金を持たない密航青年であつた新島は、渡航の代償として船上での労役を強いられた。その種の仕事をそれまでしたことのない新島は、水夫が召使いのような乱暴な態度で対したことに反撥したくだりである。一八九〇年にすでに刊行されていたディヴィスの『新島襄の生涯』でもこのできごとに言及されている(一九七七年小学館刊の北垣宗治訳では二九ページ)。片山が読んだとすれば、それは一八九〇年に京都で刊行された英文の“A Sketch of the Life of Rev. J. H. Neesima,” by J. D. Davisであつたか、あるいは、翌一八九一年に東京警視社から刊行された村田勤・松浦政泰共訳『新島襄先生之伝』であつたかは、はっきりはしない。片山の新しいエピソードにかかわる知識がこれらの本から得られた可能性は極めて高いが、出典を明示してい

ないことからもうかがえるように、新島のこの小事件が、すでに著名な、よく知られたものになっていったということもできる。

欧米に学ぼうとする日本青年にとって、もっとも不可欠な資質は忍耐である、こう片山潜は強調した。新島襄のエピソードも、もっぱらこの点を主張し強調する例証としてのみ利用されている。片山が書き残したメモワールに記されているかぎりでも、片山自身の一三年間のアメリカでの苦学生活は、屈辱に耐える歴史であった。忍耐を強調したこの片山の文章は、自身のアメリカでの体験そのままを述べたものと考えてよい。日露戦後のアメリカにおいて一段と激化した排日の風調に対して、片山は基本的には日本人の国際理解の不足を説く立場ではあったが、それでもその排日気運に対して「是れ狭量にして自負心満々たる北米人の為しけしうなる卑劣手段なりとす」(片山「北米日本人排斥の真相」一九〇七年)といった感情的表現が登場する。ふと散見する片山の文章のなかのこうした表現に、彼がアメリカですごした若き日々の、屈辱の傷の深さを想像することができ

よう。

にもかかわらず片山が青年たちに渡米をすすめ、また自分自身もアメリカでの事業経営を成功させる夢を捨てなかつたのは、このような屈辱に耐えるに値するすばらしい「文明」の世界として欧米の社会をとらえたからに外ならない。欧米の先進性・優越性に圧倒されつつも、それを学ぶことが、祖国の「近代化」と、その担い手としての自らの立身出世を同時に保障するものであるという確信、つまり国家と個人の調和的發展についての樂觀にみちた図式という、明治青年を普遍的にとらえた夢をここにもみることができよう。片山潜を、この日本共産党の創設者の一人、コミンテルンの客員という「予断」なしにみれば、彼もこうした愛国と立身を願う明治青年の類型にびつたりとあてはまる。片山にとっての欧米の先進性・優越性とは、あるときは先進資本主義としての文明であり(『鉄道新論』一八九六年、『英国今日之社会』一八九七年)、そのもとでの社会政策であり(『都市社会主義』一九〇三年)、あるいは「世界の大勢」としての「万国社会党」で

あり(『我社会主義』一九〇三年)、さらには「ボルシェヴィキ」であった。(立川健治氏は『史林』一九八三年三月号「片山潜」においてこれを「タネ本思想」と名づけ、それは自らの思想的格闘なしに受容したものである、という興味深い分析を行っている。)

新島襄のよく知られた屈辱的体験を片山は、自身の思想のワクの中に見事なまでにおしこめられた形でうけとめ、紹介した。ある意味で片山の前引の文章は、自分の持っている容器の形においてしか、他者の思想をうけとめることはできないということの、ひとつの典形例を示すものといえようか。

(一九八三・七・一)

(大学人文学部研究助教授)

# 山本覚馬の人がらを憶う

住 谷 馨

山本覚馬は重度の身体障害者であった。両眼の失明と下半身の不随があり、いまでいえば障害一級の視覚障害と一級の肢体不自由の複合障害者である。この二つの障害はともに彼が四十歳をすぎたもので、中途失明であり、戦傷による背髄損傷による下半身不随である。彼のもっとも働きざかりの時期に思いもよらぬ障害が彼の人生に襲いかかった。中途失明者は人生に絶望し、死を想うことがしばしばある。彼も人の子であるかぎり、いかに

武芸に秀れ、豪快で強靱な精神の持主であったとしても光りを失ったときは人生の前途を見失い、懊悩し、自殺を考えたにちがいないと思う。しかし、彼の内面はいかに悩み深きものであったとしても彼のこの世での態度は毅然として屈せず、私事にこだわらずたえず天下国家を論じ、目を海外文化に馳せ、新しい知識の導入と近代社会をつくりだす制度の改革と政策の実施に見えぬ目を開き、動けぬ足を動かして、政治、経済、文化の指導的役割を

果たしていた。覚馬の京都での業績を眺めるとき、きびしい障害にもかかわらず、健常者も到底及ばぬ活動を展開している。障害にこだわり、引込み思案で自己に沈潜していたのでは何一つ社会的な仕事はできなかったであろう。

障害は彼の人生の思いがけない禍いではあった。しかし、もし、彼が失明しなかったならば、鳥羽伏見の戦いの後、会津若松へ急拠帰藩し、多分、非戦論を述べて断罪の浮目に会っていたにちがいないと思う。彼は失明したために帰藩を諦め、薩摩藩に囚われ、そこで後世に残る「管見」を書き上げることができ、京都に居を定め、京都の復興と繁栄に大きな役割を果たすことができたのである。そして、新島襄との出会いも可能となった。新島襄を山本覚馬に紹介した勝海舟は、維新後の覚馬の政治的手腕と経済的手腕をよく知っており、日本の現状にうとい新島襄を新旧社会の表裏に精通している覚馬に紹介したのである。覚馬はいかな

る経済的手腕を発揮したのかはわからないが、そのとき、すでに薩摩屋敷跡を手中におさめており、御所と相国寺という旧体制の勢力の只中にある土地に邪蘇の学校をつくるべく政治的手腕を発揮したのである。覚馬のこの絶大な経済力と政治力の支えがなければ封建的な京の地に基督教の学校建設などできるものではなかったであろう。いわば、覚馬の失明の不幸が同志社をつくり、同志社をこの世に生み出したのである。それにしても覚馬が新島と出会う前に基督教を知り、この宗教に理解と関心を抱いていたということも幸いであった。彼が若くして蘭学を学び、西洋事情に明るかったことは勿論であるが、当時の先覚者西周や宣教師ゴルドルとも親交があり、さらに海外との貿易振興を図るため多くの外人と交流し、その間に彼らの信仰と教会活動を知り、「天道溯源」を読破して基督教へ開眼していたことが、新島襄をよく理解し、共鳴し、よき同志として私財をなげ出し、学校建設の礎となりえた理由であろう。覚馬には、すでに新島をうけ入れる心の準備が充分にできていたのである。また、反面、覚馬は光を失い、身体は不自由となって人間的心理的に基督教の教義に共鳴する人生的立場におかれていたともいえよう。彼は五十五歳で洗礼をうけ基督者となっている。彼の失明は彼の生命を守り、彼の思想と信仰をつくり、新島襄と結びつけ、京の地に同志社をつくり、さらに、多くの良心を手腕に運用する人材をつくりだしたことになる。

このきびしい復合障害、ダブル・ハンディにまげず、政治・経済・教育・医学の分野に経綸を発揮し、初代の府会議長となり、

初代の商工会議所会長となり、政財界の指導者となった濱岡光哲、雨森菊太郎、田中源太郎、大澤善助などを養成し、明治二十五年、六十歳でこの世を去るまで京都の新旧文化の発展貢献したエネルギーは並大抵のものではない。彼は進取の気象をもち、障害があっても自然と人の上に立ち、高潔な人格と深い見識によって人を心服させ、開放的で磊落な人からは内外の人たちを家に招き入れ、目は見えなくとも多くの情報をとり入れ、適切な判断と決断を下すことができた。こういう人格、人からは一朝一夕でできるものではない。彼の生れ育った生活環境のすべてから形成されるものである。彼が障害を担うまでの人生努力が、彼の障害を障害とせず、人生の禍を転じて福となす、内面的な精神機能をつくりあげたといえよう。勿論、彼は恵まれた才能と体格をもち、両親のよき素質を継承していたことは当然である。武士として、学問と武芸の道が開かれ、さらに、会津藩から江戸という広い世界で学習の機会が与えられ、秀れた人々と交流し、海外への目を開き、蘭学を学んだことも彼の人生の後半に大きく影響し、障害に屈せぬ人がらをつくり上げたのであろう。さらに、幕藩体制末期の動乱の時代、維新という革新の時代が障害とさせない山本覚馬という大きな人物を必要として、新しい時代をつくる人材をつくり上げたともいえよう。覚馬の障害の医学的な病名は不明である。彼の目は夜の弱い光りで勉強し過ぎて白内障となり、失明したのではないかと思う。また、なぜ彼が背髄を損傷したのか、これまた、よくわからない。しかし、彼の人がただけは大体のところ、想像がつくように思うのである。

(大学文学部教授)